

M. アンリ哲学の〈生〉の絶対性について —キリスト教的信は哲学的に擁護可能となるのか—

松島哲久

On the Absoluteness of the Life in the Philosophy of M. Henry: Can Christian Belief Be Defensible from the Philosophical Viewpoint?

Akihisa MATSUSHIMA

Osaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1, Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan

(Received October 3, 2016; Accepted November 25, 2016)

Abstract In this Paper it is argued that how we can defend the Christian belief from the philosophical viewpoint. M. Henry developed his phenomenology of life as the compatible philosophy with the Christian belief through the consideration of the absolute Life. If we can understand that our life would be given in the self-revelation of absolute Life in the Archi-Passibility, we could also understand the meaning of the Incarnation of the “Parole”, Logos, Verb, that is, of God. The philosophy of Henry emphasizes the importance of the “being-in-common”, “being-with”, that is, the intersubjectivity between the self and the self. As that, we could receive the incarnation of Christ in our suffering, based on Henry. I wonder, however, if without the comprehension of the death of others in the intersubjectivity as the existential question, we could believe the reality of Life, Incarnation of Christ. This is my last question to solve.

Key words —Incarnation; Archi-Passibility; absolute Life; being-with;

はじめに

私はアンリの次のような言明を文字通りに受け止めることによって、真正面からキリスト教的信の哲学的可能性について問いたいと思う。それは次のような言明である、「まさしく、〈本源的—自己〉のその〈本源的—肉〉が永遠に生成し続けるということへと関係することにおいてのみ、絶対的〈生〉の自己生成においてのみ、すなわち、絶対的〈生〉が〈本源的—受情性〉、つまり、考えられるどのような生きることの内にも、そして何よりも絶対的〈生〉の内に帰属しているこの〈本源的—受情性〉の内へと自己顕現することとしてのみ、われわれの肉のようなひとつの肉の生成が可能となるのである。(C'est seulement dans sa relation la génération éternelle de l'Archi-Chair de l'Archi-Soi, dans l'auto-génération de la Vie absolut comme son auto-révélation dans l'Archi-Passibilité, qui appartient tout vivre conceivable et d'abord au

vivre de la Vie absolut, que la génération d'une chair telle que la notre devient possible. (Incarnation, p.177; 225 頁))」¹

いかにしてキリスト教的信を哲学として語りうるのか、内的な絶対的確信を脇に置いて哲学を語りうるものであろうか。しかし、われわれは哲学を語るのに、まさに信を脇に置いて語っているのではないか。現象学はそのような方法をわれわれに可能にしてくれてもいる。アンリ哲学もまた、そのような現象学的方法を取ることによって、信を語ることなしに哲学的出発点を定めることができたと言えることができるであろう。しかし、哲学がそのようないわゆる無神論の地平に止まり続けることは、内に堅い信を持つ者にとって、満足することではない。無神論を無—神論として、すなわち、神学の否定として積極的に打ち出そうとする場合でさえも、それが信を内に持つ、あるいは、持ちたいと欲求することを積極的に肯定しないという点において、人がその欲求の内に信への

根源的志向性を持つ限りにおいて、信に対して判断を停止したままであり続けることに、同じく満足しえないであろう。再晩年のアンリの哲学はこの最後のそして最大の課題に果敢に挑んだものと考えることができる。アンリ哲学はこれによって初めて哲学としての根拠を持つと同時に、哲学を新たな可能性へと切り開くことになったと私は考える。その哲学とは、すなわち、自己触発としての生というわれわれの生の体験の根源に、まさしく絶対的生の自己触発の働きを見る哲学である。この絶対的生の確信を哲学的に語る可能性を切り開いて見せたところにアンリ晩年の哲学の存在理由がある。しかしそのような哲学は果たして成功しうるものなのであるか。

信の問題を哲学的問いと両立させようとして、「信と理解」の解釈学的循環を強調したのはP. リクールであった。大文字の生の理解の可能性こそアンリ哲学の賭け金である。アンリは、リクールのようには、解釈学へと哲学の道を譲ることはしなかった。哲学が信の可能性を切り開くことができるという、アンリがおそらく最初から抱いていた哲学への絶対的確信が、現象学と解釈学とを切り分けるリクール哲学との決別点をなすと言うことができよう。挫折したという根源的体験があつて初めて聖書が解釈の出発点に置かれるのであつて、その信のためにこそ哲学的理解が不可欠であるというのがリクールの哲学への理解である。聖書なしに、われわれの生の体験への根源的反省のみで、キリスト教的信の可能性を切り開くことが可能なかという問いに対して、リクールに抗して私たちはどう答えることができるであろうか。もし私たちの生の根底に絶対的なものの働きが厳としてあるということが真であり、それを確然として看取できるならば、その問いに肯定で答えることが可能であるはずである。アンリもまた、この可能性に賭けたのではなかろうか。この賭けはアンリの内でも成就したのであるか。もっとも、このような可能性に賭けるということ自身が、私の見解からすれば、ひとつの信仰的立場を表していると言うことができるのではあるが。

1. <受肉>ということ

まず、キリスト教的信においては、言（ロゴス）の受肉（Incarnation）としてのイエス＝キリストということが第一に来るであろう。これを絶対的<生>の自己生成として、<本源的受情性>において捉えようとするところにアンリ哲学の特異性がある。内在（immanence）としての自己触発としての生に徹するという事は、世界および世界の肉を前提としないということであり、それを前提とする身体をも前提としない哲学が、しかも現象学的に展開されうることである。世界の肉も、身体も前提としない私が肉として生成するという事の根底に絶対的生の自己生成ないし受肉があるという言明は、自己と自己との関係性において生が根源的に成立しうることを表明するものである。自己の受肉ということが哲学を信へと押し上げる要点であると考えられる。

アンリはキリスト教的意味での<超越（Transcendence）>を、<生>の内在として捉える。すなわち、「<超越>とは生ける者それぞれの内への<生>の内在を意味する。（ibid. p.176；224頁）」大文字の生が、現に今ここで生きている私の内において自己を顕現化するという事をアンリは絶対的生の内在と言い、それを大文字の超越と言い換えるのである。ここには、大文字の生自身が自らを自己自身に対して根源的に顕現することとしての内在即超越の思想が見出されると言わなければならない。それを<本源的受情性>として感情性（affectivité）の内において捉えようとするところにアンリ哲学の他の追随を許さない新しい可能性があると言うべきであろう。ここに受肉の本源的意味が示される。そしてこれが<言>の受肉として考えられるところにキリスト教的問いが接木されるのである。なぜ言、言葉なのかということ、このことに対して、共観福音書のヨハネ的観点からではなくて、現象学的・哲学的に答えるものであろうか。答えるとするれば、それはどのようにしてであろうか。すなわち、まさに<受肉>という出来事を哲学的・現象学的に語りうるのかという問である。アンリは次のように書いているのだ

が、「<受肉>ということによって私たちに顕示されることは、私たち自身が生において生成することであり、私たちの超越論的誕生である。それによって人間という私たちの条件が<息子>という条件として私たちに顕示されるのであり、<受肉>はそのような条件を私たちのいかなる幻想からも切り離して、その深淵なる真理へと送り返すのである (p.369 ; 474頁).」現象学はまさに私たちを、聖書的であれ、無神論的であれ、あらゆる幻想から切断し、受肉という真理へと向かわせてくれるものである。

アンリは次のように書いている、「<言(le Verbe)>があるひとつの可視的な身体の内へと受肉するという歴史的<受肉>が目的としているのは、次のことを人間に思い起こさせることである、すなわち、まさにこの<言>においてこそ、人間自身はそのはじめに神に似せて、神に似たものにしたがつてつくられたのだということ、つまり、不可視のものにおいてなのだということである。<受肉>ということによって人間に顕示されることは、その不可視の生成ということである」(p.369 ; 474頁)。まさに人間がその当の不可視なものとして生成するということが、ここにアンリの哲学的力点が置かれて<受肉>の現象学が展開されているのであって、それによって<受肉>の現象学はキリスト教的信の問題へと接続されることになるのである。このような観点から、<受肉>の事態は次のように説明される。「<言>がキリストの肉の内に受肉して、世界において人間たちに可視的となると、それによってすべての者たちが見るのは、それこそが自分たちが似せてつくられたあの<言>なのだということであり、そうしたすべての者たちの神的条件を顕らかにするのである。……それが受肉したとき、自らを人間として、すなわち神の似像である人間として他の人間たちに示したのであり、この人間において他の人間たちに示したのは、自分が最初の<似像>であって、それに似せて人間がつくられたということ、他の人間たちに自らにおいて示したのも、それが<言>なのである。……<言>があるひとりの人間という条件の内へと<受肉>するというこ

とで意味されていたこととは、それゆえ、結局のところ、あらゆる生きた肉の<自己>がこの<言>の内において生成するという超越論的生成のことだったのである」(p.370 ; 475頁)。これが「<言>において絶対的<生>が自らを—顕示すること」(p.371 ; 476頁)として語られるのである。

<言>、<言葉>に焦点が当てられるのは、それが不可視のものだからであり、アンリの自己触発の現象学に通底するからである。<言葉>であるということは、不可視のものにおいて絶対的生が自らを—顕示するということの意味されるのであり、その不可視のもの<受肉>、<言>の<受肉>によって、まさに可視的な身体において見えるようになったその<言>が何かということこそ、キリスト教的信に根本から関わることだからである。これが受苦としての<本源的受情性>において受け止められるところに、言と生との根源的繋がりを見て取ることができ、この理解が本源的知解性として語られることになる。すなわち、真理としてのイエス＝キリストの問題が問われ、また、哲学、すなわち現象学としての哲学と神学との関係が問われることになるのである。

アンリによれば、神学は「自らを絶対的なものとして与えるあの<真理>の内に基礎を置く (p.361 ; 463頁)」。すなわち、神の<言葉 (la Parole)>を<真理>の<言葉>として捉えるところに神学の立ち位置がある。言い換えれば、神学とは、私たちの思惟がそのような真理の言葉において働いていることの確認の作業だと言ってよい。しかし、そこで働いている思惟は、同時に、肉の現象学であり、<受肉>の現象学である。このような思惟は、「<生>において自己に顕示されている (p.363 ; 465頁)」そのような現象学的思惟である。「絶対的で唯一の超越論的現象学的<生>とは本来、自己自身を自らにそのパトス的な自己—触発において、他の誰であれ、何であれ何ひとつ負うことなしに顕示することなのであって、そのような<生>のみが人間の実在を、その本質において、現象学的なものとして定義しうるのである (ibid.)」したがって、超越論的<生>の自己—触発として自己が自己自身に顕示される

というそのことにおいて、ただそのことにおいてのみ、私たちに受肉の現象学が示されるとアンリは主張しているように思われる。生を現象学的に捉えることによってアンリは、哲学としての現象学と神学そして思惟そのものに先立って働いている「絶対的<生>の<本源的知解性>」において、哲学と神学の区別を解消しようとするのである。すなわち、それは「私は汝の内にある真理について確信している」という神学的立場、「もはや生きているのは私ではなく、汝こそ私の内で生きている (p.372 ; 478頁)」、 「私の生はもはや神の生以外の何ものでもない (ibid.)」 という確信は、<生>を超越論的現象学的<生>として理解することでもあるという意味で、同時に哲学的なのである。しかし、聖書において語られた<言葉>を神の<言葉>、すなわち、<真理>として受け止めることを可能にする本源的知解性に、私たちは本当に達しうるものであろうか。その確信から出発することが本当の意味で現象学的<生>の理解と言えるのであろうか。ここで問われるのが生の現象学における他者理解の問題である。

2. 生の現象学における他者理解とキリスト教的他者関係

2-1 生の現象学

アンリ哲学においては、「ある<自己>と他の<自己>とのあらゆる関係」の出発点として、それらに共通の超越論的可能性、すなわち絶対的<生>が考えられている (p.347 ; 445頁)。「どんな<自己>であれ、したがってまた考えられるどんな自我(moi)であれ」、「それらを生きた<自己>および生きた自我として生み出す」ものこそ絶対的<生>なのである (ibid. ; 445~446頁)。すなわち、「生きた者たち相互の関係」はこの絶対的<生>において成立するのである (ibid. ; 446頁)。そこから、他者経験における「共に一在ること (être-avec)」が源初的<自己性>(Ipséité originaire)における絶対的<生>として示される (p.348 ; 446頁)。このように<生>が源初的<自己性>において捉えられて、絶対的<生>として示されることによって、それによって構成される

ものが、共有されて在ることのその「共有一されて一在ること (être-en-commun)」の超越論的可能性であり、関係としての関係であり、優先的仕方における共に一在ることなのである (p.349 ; 448頁)。したがって、超越論的なく自己>と<自己>との関係性は、《共に一在ること》が優先して絶対的<生>において成立すると考えられる。ここからアンリは、この絶対的<生>への超越論的<自己>それぞれの関係を「宗教的絆」(ibid.)として呈示する。しかも、その共同体(communauté)の実在性は不可視であり、世界と疎遠であって、キリスト教的核心を形作る逆説的關係の領野を開くとアンリは考えている (p.349-350 ; 448-449頁)。そこで見出されるのが相互主観性であるが、それはケルケゴールが示したような、時代を超えた超越論的<自己>と<自己>との関係性において考えられる相互主観性である。したがって次に問われなければならないことは、絶対的なく他なる自己>としての神との関係性であり (p.350 ; 449頁)、直接に神学的・キリスト論的他者論である。

2-2 キリスト教的他者

私たちが、この方向性において目指しているのは、現象学的な他者論を媒介しながら、その相互主観性における生の関係性の理解、共に在ることの理解をキリスト論的關係性へと連結することである。それは端的に絶対的<生>と<最初の生ける者>との間の相互的な現象学的内面性関係を問うということである。その相互性に関して、アンリはヨハネを引き合いに出して次のように言う、「<父>の<息子>への現象学的内面性は、<息子>の<父>への内面性として常に指定されているのである (p.351 ; 450頁)」。この意味するところは、現象学的観点として絶対的生が自らを自己自身において体験するということと、<最初の生ける者>が絶対的<生>において自己を体験することが重ね合わせられて、その相互性として、キリスト論的に<父>と<息子>の相互性が呈示されるということである。すなわち、大文字の<生>が自己自身を体験するということによって、まさに私たちの生を超えた<生>の絶対性に

において「最初の自己」が生成するというのである。この絶対的生と私たちの生との間にひとつの深淵があること (p.351 ; 451頁) をアンリは認めるが、しかしこの深淵を超り越える合一 (union) ということがすぐに言われるのである (ibid.)。その合一が遂行されるのは、「言」があるひとりの人間の肉の内へと「受肉」すること (ibid.) によってなのである。そのひとりの人間とは、「そのようなものとして「神から到来」し、「神によって遣わされて」いる人、すなわちメシア、つまりキリスト」 (ibid.) のことである。この事態をアンリは次のようにまとめている、すなわち、「かくして人間は、＜生＞がその＜言＞において為すような源初的な自己体験において、自己自身を体験することによって、＜言＞に似たもの、神に似たものとなった」のである。また、肉への合一は＜言＞への合一であり、絶対的＜生＞への合一である (ibid.)。したがって問題なのは、私たちがどのように自己自身を体験するのかということである。すなわち、自己が自らをそれにおいて体験するその生が、すなわち肉としての私たちの生が絶対的生において生成するということを、まさにその自らの自己体験において確信をもって言うことができるであろうかということである。ここでもう一度、不可視のものとしての言の問題が出て来る。すなわち、言への合一という、まさにキリスト論の核心の問題である。

深淵の超り越えと合一、とりわけ＜言＞への合一は、受肉した＜言＞としてのキリストへの合一を指し示すが故に、すぐれてキリスト論的信仰と重なり合う。まさにそれは、私たちが自らその生において自己自身を体験するとき、その生が絶対的＜生＞において体験されているということをかたちに私たち自身が真に確信しうるのかということに関わっている。これは最初に引用しておいた、＜本源的－受情性＞のうちへの自己顕現としての私たちの肉の生成の問題として論じられるべきことである。すなわち、私たちの肉の生成が＜本源的－肉＞の永遠の生成として語られるところに問題の信仰の核心がある。「肉が存在するのはただ、あるひとつの受肉においてのみ、＜言＞が絶

対的＜生＞の＜本源的－受情性＞のうちで＜受肉すること＞においてのみ (p.374 ; 481頁)」なのである。さらにこの＜本源的－受情性＞は「純粋なく受苦すること (Souffrir)」と、この＜受苦すること＞から生じた純粋なく享受すること (Jouir) という源初的な現象学的諸調性のうちで現象化される (p.357 ; 459頁)」のである。この大文字の＜受苦すること＞はキリストの受肉と受難に直截に関わる。

2-3 共にあることとしての受苦：他の内における自己

「受苦 (souffrance) によって定義されたあるひとつの肉の実在性からこそ、キリストの＜受肉＞と、典型的な仕方で、キリストの受難とが、いまやその実在性と真理とを受け取るのである (p.188 : 239頁).」この受苦と受肉ということ、《共有－して－在ること》(être-en-commun)、《共に－在ること》(être-avec) と関連させて論じることによって、それらを私たちの生、すなわち人間の生との関係性において問うことが可能となる。そしてこの受苦するということが同時に、絶対的生の内での自己自身を体験することとして、自己を享受することでもあるということから、それをアンリは、あるひとつの他 (un autre) の内で自己自身を享受し、愛することとして問題を提示するのである (p.351 ; 450頁)。このことをアンリは、＜言＞と関連させながら、次のように語っている、「絶対的＜生＞の過程、すなわち＜生＞とその＜生＞の＜言＞との間の現象学的内面性の関係としての過程のあの内的構造が、この絶対的なものと人間との間の関係の中で、この場合は、絶対的なものの＜言＞とあらゆる考えられる超越論的＜自己＞との関係の中で反復されるということである (ibid.)」。＜言＞について言えば、「まさに＜言＞それ自身において、＜本源的－息子 (Archi-Fils)＞の源初的＜自己性＞においてこそ、あらゆる超越論的＜自己＞は、それがあの＜自己＞にほかならないものとして、それ自身に結び付けられ、それ自身に与えられるのである (p.351 ; 451頁)」と言われる。すなわち、これは先に引用した「ひとりの人間としてのキリスト」

の肉への〈言〉の受肉、「人間の救済に開かれた道としての受肉」を意味する。この受肉によって「人間が神によってその似像にしたがって創造された」という創造の意味が了解されることになる。すなわち、「絶対的〈生〉がその〈言〉へと自己生成することの内での人間の生成—人間の超越論的誕生 (p.352 ; 451頁)」として了解されるのである。このような人間すべての間の源初的關係としての他者経験の理解が、絶対的生とその言との、またあらゆる生ける者との、相互的な現象学的内面性においてなされるということが、現象学的観点がキリスト論的観点と結び合わされて語られることになるのである (p.352 ; 452頁)。

3. 人間身体の可視性と肉の不可視性

キリストの受肉を、人間身体が受苦としての肉の实在性において生きられることにおいて、〈言〉の受肉としてのキリストが私たちとの共同性—《共に—在ること》として理解しようとするアンリ哲学の試みを、人間身体の可視性と肉の不可視性の問題として問い直すことによって、現象学的生理解がどのようにキリスト教的理解と関係するかを最後に検討することにする。それは人間の生と死の問題に根幹的にかかわる問いである。

私たちは誰であれ他者とどのように関わるのであろうか。《共に—在ること》において他者としてのキリストが受肉しているということを現象学的内面性において理解するということが信を可能にするものであるとすれば、逆に、そのような信を可能にする他者との関係性とはどのようなものでなければならないのかということが問われなければならないであろう。そのためには受苦と受肉の問題が信の手前にある私たち自身にとってどのように理解されるのかが問われなければならない。とりわけ受苦において自己自身を体験している生が、まさに絶対的生の内での自己自身を体験していると確信できるのはどうしてかということである。言い換えれば、キリストの受肉を《共に—在ること》において私たちはいかに理解しうるのかということである。そのためには《共に—在る

こと》、《共に—して—在ること》を可能にしている他者との相互的關係性、あるいは相互主観性において私たちが生きているということそのことの意味が根底から問われなければならない。そのことがまさに私たちに受肉の意味を了解させ、そのことによって信を可能にするものであるということが示されるのでなければならないのである。

ここで問われるのは他者と《共に—在ること》が肉の实在性において生きられることの意味である。人間身体は可視性において私たちの生において体験されているが、しかしその可視性は肉の不可視性によって生きられているということがアンリの主張するところである。身体の可視性はそれが生きられたものである限りにおいて肉の不可視性と一体となっている。アンリにとっての問いは生きること、絶対的生において生きることへの問いであるが、それはキリストの肉への〈言〉の受肉への問いであった。私たちの問いは、絶対的生において〈言〉が受肉として理解されるその可能性である。逆に問われるのが、他者としてのキリストへの出会いの可能性である。他者がまさに《共に—在ること》の内へと関係するのは受苦を通してであり、その不可視性においてであるとすれば、先のキリストへの出会いの可能性は、《共に—在ること》の内における受苦の可能性に他ならない。それが肉の不可視性としてアンリでは示されているのである。最後に、キリストの受肉ということがイエスの受難すなわち死と一体であることの意味を、私たちが他者と《共に—在ること》においてどのように受け止めて、その生の体験を信へとどのように結び付けうるのかということによって本論攷を終えることにしたい。

おわりに

アンリは絶対的〈生〉を語るが故に、死についてはほとんど語らない。キリスト教的信仰が主題化されてくる最晩年の『受肉』、『キリストの言葉』²においてもそうである。「キリストの受難」ということで死が意味されているかのようである

が、しかしそれは「受苦」としての生であって、「＜本源的－受情性＞への絶対的＜生＞の自己顕現」において理解されるべきものである。死は世界との関わりなしには理解されないとすれば、すなわち私たちと親しい人の死が世界における私たちの相互の関係性において現象し、悲痛なものとして受け止められているとすれば、その死は世界における肉と関わるものとして理解されるのであろうか。私たちの生も、絶対的生の自己生成において成立しているとすれば、他者との関係性は、そのような絶対的生における自己と自己との関係性として成立していると考えなければならない。これは先に述べたように、可視的な身体的生が不可視の肉としての生によって生きられていることを意味している。そうであるとすれば、この私の身体において不可視の肉としての生が内在し私をその根底から生かしている、あるいは絶対的＜生＞に触れることを可能にしていると言うことができるであろう。キリストが私たちの肉に受肉するということが、私たちを死から、あるいは罪から救い出すことを可能にするものであるというこのキリスト教的信仰が、私自身の生の根底においてどのように受け止められうるのか、まさに信仰の問題として、問われなければならないであろう。生の内在において絶対的＜生＞が自己顕現されていて、私たちがそれによって絶対的生において生きることができるということと、キリストの言葉が私たちの生において受肉するということが同時的であるとしても、そしてその事実を受け止めることができているということが信仰を証し

するものであるとしても、しかしそれが世界と世界の肉を前提としないということの意味するとすれば、私の生きた身体においてそのような内在としての生が感じ取られているそのことにおいて生を語るということ、そして共に－在ることにおいて他者の生と死の苦悩を共にしうことは、どのようにして可能となるのであろうか。私の親しい人が死にゆくこと、あるいは死んでしまったということ、また逆に私が共に－在る親しい人に対してまさに今ここで死につつあるということ、つまり私と他者とが同時に死を共にするということが不可能なのであろうか。そのような死についての実存的問いが私にはいまだ解決しないで残っている。生の絶対性において生きうるということ、このことは果たして死を共にするという根源的経験なしに可能なのであろうか。これが私の最後の問いである。

註

- 1 Michel Henry, *Incarnation: Une philosophie de la chair*, 2000 by Edition du Seuil (『受肉 肉の哲学』中敬夫訳、法政大学出版社、2007年。以下引用カッコ内には同書の引用頁を原文を先に、次に翻訳の頁を掲載する。) 太字は筆者による。
- 2 Michel Henry, *Parole du Christ*, 2002 by Edition du Seuil (『キリストの言葉－いのちの現象学』武藤剛史訳、白水社、2012年。)